

サービスラーニングが卒業生の行動に及ぼす 学習効果に関する研究

A Study of the Effects of Service Learning on the Behavior of Graduates

中 村 知 子
Tomoko Nakamura
藤 原 由 美
Yumi Fujihara
三 浦 智恵子
Chieko Miura
伊 藤 敦
Atsushi Ito

抄 録 早くから米国で取り入れられてきた体験的教育を基礎としたサービスラーニングを、本学では毎年100名以上の学生が参加する学生スタッフ活動（SSS活動：サンノースチューデントスタッフ活動）などの正課外学習と「キャンパスサービスラーニング」（2003年度～2007年度）や「サービスラーニング」（2008年度～）という正課学習の科目を履修することによって実践している。

これらの学習効果の検証は、正課学習科目と卒業時の調査で行い、これらの学習がキャンパスコミュニティの醸成や個人の成長に一定の効果を上げていることが確認されていた。しかし、この学習効果は、在学時に確認されたものであり、これらの学習が卒業後にどのような効果を与えるかは捉えられていなかった。そこで、このサービスラーニングを実践した学生の卒業後のキャリアや社会性の形成に、これらがどのような効果や影響を与えているか検証することにした。本学のサービスラーニングの学習効果を検証するための調査手法の検討と作成を行い、それらを実施した結果から今後の課題を明確にする。

キーワード サービスラーニング 卒業生 学習効果 効果測定 社会性 キャリア形成

- | | |
|--------------------------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 3. 効果測定の手法の検討と確定 |
| 1.1 目的 | 3.1 効果測定の手法の検討 |
| 1.2 研究方法 | 3.2 質問紙調査法の実施概要 |
| 2. サービスラーニングを実践している他大学の学習効果の測定に関する調査 | 4. 効果測定の実施とその結果 |
| 2.1 サービスラーニングの効果測定における評価軸 | 4.1 インタビュー調査の実施概要 |
| 2.2 日本の大学及び高校における効果測定 | 4.2 インタビュー調査 |
| 2.3 他大学へのインタビュー調査結果 | 4.3 質問紙調査 |
| | 5. 考察 |
| | 6. 今後の課題とまとめ |

2012年5月9日 受理

1. はじめに

1.1 目的

本学では、毎年100名以上の学生が参加する学生スタッフ活動（SSS活動：サンノースチューデントスタッフ活動）¹⁾を2003年度から実施している。本学では、このような学生スタッフ活動などの正課外学習を通して、学生はサービラーニングを実践している。

このSSS活動などが本学のキャンパスコミュニティの醸成や学生個人の成長において一定の効果をあげていることは、卒業時に実施されるアンケート調査や2007年度まで実施されていた「キャンパスサービラーニング」科目やその後の「サービラーニング」科目で確認されていた。ただ、このどちらの評価も卒業時や在学時のものであり、このサービラーニングを実践した学生の卒業後のキャリア形成や社会生活に、これらの学習が何らかの効果や影響を与えているのか、それらの具体的な内容としてどのようなものがあるのかを捉えていなかった。

そこで、このサービラーニングを学習した学生に対して、これらの学習が卒業後どのような効果や影響をもたらしているかを調査し、その効果や影響の内容を分析し、まとめることにした。また、これらの調査とその分析から得られた結果を、現在行っているSSS活動や「サービラーニング」科目に反映させることによって、サービラーニングの学習効果を今以上に高めることができると考える。

本学の教育実践方針に沿って実施されているSSS活動などの正課外学習を通して、ここで実践されているサービラーニングが、卒業生の社会生活にどのような影響を与えているのか、その効果と影響を調査するための測

定手法の検討と作成・実施を行い、それらから得られた結果をまとめ、今後の課題を明確にしていく。

1.2 研究方法

サービラーニング教育を実施している大学が、その教育効果の測定をどのように行っているかを調査し、そこからサービラーニングの学習効果や影響を測定する手法を検討していく。

これらの調査方法としては、サービラーニングの効果に関する文献調査とサービラーニング教育を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。

インタビュー調査においては、サービラーニング教育やこの教育に基づく授業を実施している代表的な大学の一つである昭和女子大学のコミュニティサービラーニングセンターを訪問し、サービラーニングの実施状況と学習効果の測定についてのインタビューを実施する。

文献調査とインタビュー調査の結果をもとに、検討・作成された手法を用いて卒業生にサービラーニングの学習効果を測定する調査を実施し、その結果の分析とまとめを行う。

2. サービラーニングを実践している他大学の学習効果の測定に関する調査

2.1 サービラーニングの効果測定における評価軸

桜井(2007)²⁾は、サービラーニングの教育的効果として、高等教育を受けたものにふさわしい人間性・社会性の形成、専門学習への動機付けと理解向上、高等教育機関における社会貢献の三つを挙げた。しかし、これらの効果を測定・評価することは当然ながら

容易ではなく、多様な視点から測定・評価をされる必要があるとらう。具体的には、サービスラーニングに関わる三者、すなわち、学生自身による自己評価、サービスラーニングの受け入れ先である地域団体など、そして授業を担当する教員による評価である。

サービスラーニングはアメリカにおいて発展した教育形態であるが、そのアメリカにおいては多様な評価方法が開発されている。

Bringle et al (2004)³⁾ は、動機と価値 (Motives and Values)、道徳的成長 (Moral Development)、自己及び自己概念 (Self and Self-Concept)、学生の発達 (Student Development)、態度 (Attitudes)、批判的思考 (Critical Thinking) という6つの評価軸⁴⁾を提示している。この評価軸は本学におけるサービスラーニングの効果測定の評価項目として用いることができると思われる。

2.2 日本の大学及び高校における効果測定

サービスラーニングの教育効果を測定している大学、短期大学は、日本では管見する限り少ない。尾崎・山本 (2011)⁵⁾ は、関西国際大学における海外サービスラーニングの効果測定を、2010年度にプログラムに参加した学生19名のうち2名を対象として、学生の振り返りシートと活動先のインタビュー記録を基に行った。同大学におけるサービスラーニングの目的は、知的好奇心、多様性理解、情報収集/発見力、試行/判断力の4つであるが、その結果、ジェネリックスキルの獲得には効果があった反面、アカデミックスキルの向上は明確に見えないと報告している。

橋本 (2010)⁶⁾ は、吉備国際大学における、海外サービスラーニング及び国内サービス

ラーニングの効果測定を行っている。対象学生は海外が2008年度の18名、国内が2008年度の30名であり、海外サービスラーニングでは異文化理解が、国内サービスラーニングでは自己理解、問題解決力などに効果があったと報告している。桜井 (2007)²⁾ は、立命館大学ボランティアセンターにおける地域活性化ボランティアプログラムに参加した学生52名を対象にアンケート調査を行い、その成果として、地域社会に参加する意義や方法、仲間との配慮・協力などを挙げている。

高校では、山田 (2007)⁷⁾ が福岡県宗像市在住の高校生23名を対象とした調査を行っており、サービスラーニングを通して、自己肯定感の獲得、学習意欲、コミュニケーション能力、社会認識、リーダーシップの涵養に一定の効果があることを明らかにした。また、平山 (2009)⁸⁾ は、高校生のサービスラーニングに関わる教職員などを対象にアンケート調査を実施している。

大学における効果測定は、海外サービスラーニングについて実施された調査が多く、また、その対象者の数も限られていた。

2.3 他大学へのインタビュー調査結果

サービスラーニングを積極的に実施している大学の一つである昭和女子大学を訪問し、そのサービスラーニングの実施方法や教育効果の測定についてインタビュー調査を実施した。

(1) 調査概要

日時：2011年3月3日 (木) 10:00~11:00

場所：昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター (昭和 CSLセンター)

対象者：人間社会学部福祉環境学科特任教授
昭和 CSLセンター長 興侶寛氏

昭和 CSLセンター 障がい学生サポ
ートセンター 関根史恵氏

(2) 調査内容

昭和女子大学は、世田谷区にキャンパスを有する、学生数約4,400名（短大・大学院をのぞく、四年制大学のみ）の女子大学である。2006年度から、新しい教育実践プログラム「コミュニティサービラーニング」の授業が開講されており、すべての学科（7学科）に、サービラーニング関連科目が設置されている。全学的に科目との連動を重視した活動を行っているのが特徴で、2008年度から学内に設置された「コミュニティサービラーニングセンター（昭和 CSLセンター）」は、近隣にある世田谷ボランティアセンターと提携している。

昭和女子大学におけるコミュニティサービラーニングの学習方法は、受講条件の確認から始まり、オリエンテーション、事前学習、保険への加入、CSL活動の実践、総括学習、レポート試験という流れになっているが、中心は20時間に及ぶCSL活動の実践である。学生がいくつかのプログラムの中から選択し、国内外で活動を行う。

CSL活動における教育効果の測定に関しては、総括学習の中で学生が実施する活動の振り返りや活動報告書を通じて確認している。卒業生に対する教育効果の測定・評価については、2011年3月に、CSL活動を経験した卒業生をはじめ送り出したばかりという状況のため、今後の課題として検討している段階であるとのことだった。⁹⁾

3. 効果測定の手法の検討と確定

3.1 効果測定の手法の検討

教育効果の測定方法としては、卒業生に対

する調査という点を踏まえて、質問紙調査法による調査を実施することにした。サービラーニング活動の効果の検証にあたって、活動経験の有無を比較するため、短大在学中にサービラーニング活動に参加していた卒業生200名、参加していなかった卒業生200名（ともに卒業5年以内）を対象として質問紙を郵送した。卒業5年以内の卒業生を対象とした理由は、本学のサービラーニング活動と科目の両方が本格的に実施された時期を考慮していることである。また、学園祭で来校した卒業生にも同じ質問紙を用いて調査を実施した。さらに、質問紙調査の補完として、サービラーニング活動を行っていた卒業生6名に対し、インタビューを実施した。

3.2 質問紙調査法の実施概要

卒業生に対する質問紙は、表1の通りである。調査項目は、本学の教育実践方針「自らの問いを發して考え、行動し、仲間とともに課題に真剣に取り組み、共に学びを深める」を踏まえて、本学のサービラーニングが力を入れている仲間サポートなどの「人をサポートする力」や「仲間と協働する力」についての教育効果を測定するものとした。

また、卒業生の職場や日常生活という二つのコミュニティにおけるこれらの教育効果を測定することにし、表2の通り項目を具体的に設定した。

なお、これらの効果測定項目については、Bringle et al (2004)³⁾の評価指標、桜井 (2007)²⁾のサービス・ラーニングの評価軸などにある評価軸にあてはめて考え、表3のような分類を行い、評価項目の検証を行った。

表1 卒業生に対するアンケート調査用紙

「卒業生におけるサービスラーニングの効果や影響」に関するアンケート

1. あなたが履修していたコースに○をつけてください。(1つだけ)

①「アドバンス」 ②保健 ③観光・語学 ④情報・情報ゼミ ⑤ITの学び
⑥経営戦略 ⑦情報コミュニケーション ⑧経営会計

2. あなたの卒業した年を教えてください。 年 月 日 年

3. あなたが留学中に参加していた活動の名称に○をつけてください。(いくつでも可)

①3ヵ月研修(CAFT (オタリヤン) FALM SEED LINK ⑨海外研修実務員
⑩海外大会 ⑪海外研修 ⑫参加していない

4. あなたの今の状況を教えてください。(1つだけ、複数該当する場合は、いくつでも可)

①正社員 ②准社員 ③派遣社員 ④フリー、パート ⑤主婦
⑥専業主婦 ⑦学生 ⑧その他()

5. 上記の4で①、②、③、④に○をつけた方のみ答え下さい。
あなたの仕事(職種内容): どのような内容ですか。(1つだけ)

①一般事務 ②営業事務 ③企画事務 ④システム業務 ⑤店舗での販売
⑥ネット作業 ⑦設備維持 ⑧接客対応 ⑨その他()
具体的な仕事内容を書いて下さい。

6. あなたが職場で習得できている(できていた)と思うものに○をつけて下さい。(いくつでも可)

①人前で話す力 ②ホスピタリティ ③改善・工夫する力 ④クレーム対応力
⑤顧客の人間関係を調整する力 ⑥後輩などに対するサポート力 ⑦顧客対応力 ⑧仲間と協働する力

7. あなたが職場や家庭との日常生活などで習得できていると思うものに○をつけて下さい。(いくつでも可)

①人前で話す力 ②ホスピタリティ ③改善・工夫する力 ④問題への対応力
⑤人間関係を調整する力 ⑥周囲の人に対するサポート力 ⑦コミュニケーション力

8. 短大での活動や学習があなたの仕事や生活での「人をサポートする力」に活かされていますか。
(1つだけ)

①活かされていない ②あまり活かされていない ③どちらとも言いえない
④活かされている ⑤活かされている ⑥活かされている
どのような点で活かされている(活かされていない)と異なりますか。

9. 短大での活動や学習があなたの仕事や生活での「仲間と協働する力」に活かされていますか。
(1つだけ)

①活かされていない ②あまり活かされていない ③どちらとも言いえない
④活かされている ⑤活かされている ⑥活かされている
どのような点で活かされている(活かされていない)と異なりますか。

10. 短大での活動や学習を通して希望の活動にははまる機会に○をつけてください。
あなたにははまらない(希望度の低い)機会に○をつけてください。

	希望度の低い機会に○をつけてください	希望度の高い機会に○をつけてください	希望度の低い機会に○をつけてください	希望度の高い機会に○をつけてください	希望度の低い機会に○をつけてください	希望度の高い機会に○をつけてください
1 「サポート力」を身につけることができた						
2 「ホスピタリティ」を身につけることができた						
3 「ボランティア精神」を身につけることができた						
4 社会の問題や状況に基づいて行動することができた						
5 自分や他者を見つめ、それに基づいて改善・工夫ができたように感じた						
6 自分や他者を見つめ、それに基づいて改善・工夫ができたように感じた						
7 仲間とともに課題に取り組むことができたように感じた						
8 自分が経験したことの振り返りができたように感じた						
9 留学中は、活動や授業と関係を持ち、積極的に参加していた						
10 留学中は、他のコースにも研修や実務をした						

11. 短大での活動や学習から得ることができたものは何ですか。

以上、ありがとうございます。

表2 教育効果の測定項目

・人前で話す力	・ホスピタリティ	・改善・工夫する力
・クレーム対応力	・職場の人間関係を調整する力	・人間関係を調整する力
・顧客対応力	・キャリアを考える力	・コミュニケーション力
・仲間と協働する力	・社会問題に対して気づく力	・振り返りを行う力
・課題解決力・達成力	・周囲の人に対するサポート力	・後輩などに対するサポート力

表3 本学のサービスラーニングの評価項目

評価軸	本学の教育効果の測定項目
動機と価値	ホスピタリティ、職場の人間関係を調整する力、後輩などに対するサポート力、人間関係を調整する力、コミュニケーション力
道徳的成長	クレーム対応力、顧客対応力
自己概念	人前で話す力、社会問題に対して気づく力
学生の発達	キャリアを考える力、課題解決力、課題達成力、
態度	仲間と協働する力、周囲の人に対するサポート力
批判的思考	改善・工夫する力、振り返りを行う力

4. 効果測定の実施とその結果

4.1 インタビュー調査の実施概要

インタビュー対象者の6名は全員サービスラーニングの正課外学習の経験者であり、質問紙と同じ測定項目でインタビューを実施した。特に「短大での活動や学習があなたの仕事や生活での『人をサポートする力』『仲間と協働する力』にどのように活かされているか」という点については、重点的に聞き取りを行った。

4.2 インタビュー調査

(1) 調査方法

インタビュー調査時期は2010年11月から12月の間で、調査対象者の属性はアンケート調査対象者と同様であり、アンケート調査に協力した卒業生の中から無作為に抽出した6名を対象とした。対象者の①出身コース、②卒業年度、③今の状況、④参加していた正課外学習は次の通りである。

A：①秘書、②2009、③正社員、④CAST

B：①秘書、②2009、③正社員、④CAST・キャンパススタッフ

C：①秘書、②2009、③正社員、④SEED・キャンパススタッフ

D：①経営情報、②2009、③正社員、④PALM

E：①メディアデザイン、②2009、③正社員、④CAST・産能祭実行委員

F：①メディアデザイン、②2009、③正社員、④産能祭実行委員

調査内容は、表1の卒業生に対するアンケート調査用紙と同様の内容で実施したが、特に「産能での活動が今の自分に役立っていること」、「産能での活動や学習から得ることが

できたもの」の2項目を中心に行ったため、それぞれの観点からの分析をすることとした。

(2) 調査結果

①「産能での活動が今の自分に役立っていること」

職場で発揮できていると思うものとしては、「人前で話す力」が多く、「目上の方とも自然に話すことができ、その場にあった敬語を遣うことができていると思う」などのコメントがあった。日常生活では、「コミュニケーション力」が多く、「会社の女子寮の共同生活は産能で体験したグループワークに通ずるものがある」などのコメントがあった。

次に、「人をサポートする力」が職場や日常生活で活かされているかについては、「今の部署では各々の担当が分かれているが、自主的に自分でできる範囲で手伝うようにしている」、「契約書を作っておいてと言われたら、可能な限りその先の作業も先手を打って行っておくよう心がけている」などのコメントがあった。また、「仲間と協働する力」が職場や日常生活で活かされているかについては、「会社の業務改善プロジェクトを5人チームで行っているが協働することに慣れているので、会議の進行なども任されている」などのコメントがあった。

②「産能での活動や学習から得ることができたもの」

産能での活動や学習から得ることができたものとしては、「コミュニケーション力」、「マナー」、「PC能力」などを挙げる卒業生が多い。秘書コースの卒業生は「マナー・接客能力」を挙げ、秘書検定の資格を取ったことが自信につながったなどのコメントがあった。また、

経営情報コースやメディアデザインコースの卒業生はExcel・Wordなどの「PC能力」を挙げ、何となく受けていた授業が資格取得という具体的な目標を設定したことから意識が変り、Microsoft Office Specialistの資格を取得できたなど、出身コースの特性を活かした学習内容が挙げられていることが分かった。

4.3 質問紙調査

(1) 調査方法

質問紙調査は、郵送法と留置法の2つの方法を用いて実施した。調査対象は、短大在学時にサービスラーニングを実践するSSS活動などの正課外学習に参加していた卒業生200名と参加していない卒業生200名の合計400名とした。調査期間は郵送法と留置法共に2010年11月8日から21日までとした。留置法については、調査時期が学園祭と重なったため、学園祭に来校した卒業生から調査協力を得た。なお卒業生の卒業基準年数は5年以内としている。

(2) 回収成績

回収成績は400名中182枚(46%)であるが、調査別に見ると郵送法では34枚(19%)、留置法では148枚(81%)である。

(3) 属性結果回収成績

回答者182名中のサービスラーニングを実践する正課外学習の参加の有無を見ると127名(70%)が経験者で、55名(30%)が非経験者であった。さらに、現段階の回答者の職業分類を見ると、154名(85%)が正社員として働いており最も多い。その他に、契約社員が8名(4%)、アルバイト・パートが7名(4%)主婦、学生が11名(6%)、未回答2名(1%)であった。

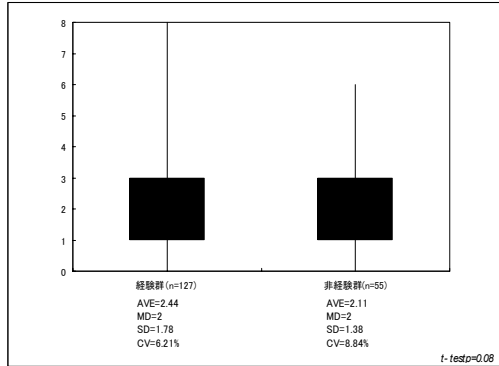
(4) 調査結果

第一に、回答者を正課外学習の経験の有無に応じて経験者群と非経験群に分類した。その上で、職場で発揮できていると思う能力について回答を求めて8点満点でスコア化(以下職場で発揮できている能力点とする)した。

これら2群のスコアを、箱ひげ図を用いて比較分析し表4に示した。ここでいう職場で発揮できている能力点とは①人前で話す力、②ホスピタリティ、③改善・工夫する力、④クレーム対応力、⑤職場の人間関係を調整する力、⑥後輩などに対するサポート力、⑦顧客対応力、⑧仲間と協働する力の8つの指標から構成されたもので、これらの能力が身についていると回答した場合は1、身につけていないと回答した場合は0で算出している。

経験群については平均値が2.44、中央値は2、標準偏差は1.78、変動係数は6.21%であるが、非経験者群については平均値が2.11、中央値が2、標準偏差が1.38、変動係数が8.84%である。したがって、経験者群の方が非経験者群よりも職場で発揮できている能力点の平均値はやや高いが、変動係数について見ると経験者群よりも非経験者群の方が2.63%も高いので、経験者群よりも非経験者群の方が職場で発揮していると思う能力にバラつきがあることが示唆されている。統計学的には有意差がない($p=0.08$)。

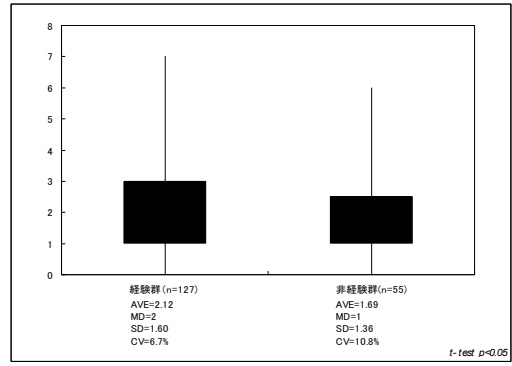
表4 正課外学習経験別に見た職場で発揮できている能力点の比較



第二に、日常生活上で発揮できていると思う能力点（以下日常生活で発揮できている能力点とする）について7点満点でスコアした上で経験者群と非経験者群におけるスコアを箱ひげ図を用いて比較分析し表5に示した。ここでいう日常生活で発揮できている能力点とは①人前で話す力、②ホスピタリティ、③改善・工夫する力、④問題への対応力、⑤人間関係を調整する力、⑥周囲の人に対するサポート力、⑦コミュニケーション力の7つの指標から構成されたもので上記と同様の手順でスコアを算出している。

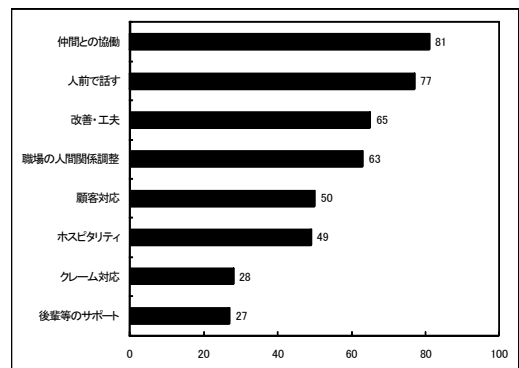
経験者群については平均値が2.12、中央値は2、標準偏差は1.60、変動係数は6.7%であるが、非経験者群については平均値が1.69、中央値が1、標準偏差が1.36、変動係数が10.8%であるので、経験者群の方が非経験者群よりも日常生活上で発揮できている能力点の代表値が明らかに高い。変動係数について見ると経験者群よりも非経験者群の方が4.1%も高いので、経験者群よりも非経験者群の方が日常で発揮していると思う能力にバラつきがある。統計学的に有意差があることが示唆されている ($p < 0.05$)。

表5 正課外学習経験別に見た日常生活で発揮できている能力点の比較



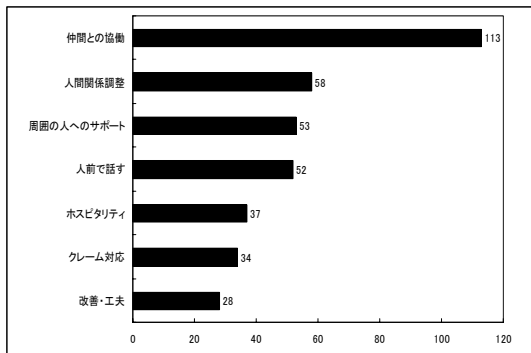
そこで第三に、職場で発揮できている能力項目の頻度について調べて表6に示した。能力項目の順位を見ると第1位は「仲間との協働」で81件である。第2位は「人前で話す」で77件、第3位は「改善・工夫」で65件、第4位は「職場の人間関係調整」で63件、第5位は「顧客対応」で50件、第6位は「ホスピタリティ」で49件、第7位は「クレーム対応」で28件、第8位は「後輩等のサポート」で27件である。したがって、これらの分析結果より、卒業生は仲間と協働したり、人前で話したりすることは得意であるが、クレーム対応や後輩等へのサポート等については能力を発揮できていないことが判明した。

表6 職場で発揮できている具体的な能力項目



第四に、地域や家族との日常生活などで発揮できている能力項目の頻度について調べて表7に示した。能力項目の順位を見ると第1位は「仲間との協働」で113件である。第2位は「人間関係調整」で58件、第3位は「周囲の人へのサポート」で53件、第4位は「人前で話す」で52件、第5位は「ホスピタリティ」で37件、第6位は「クレーム対応」で34件、第7位は「改善・工夫」で28件である。卒業生は日常生活上で仲間と協働したり、職場の人間関係を調整したりすることは得意であるが、クレーム対応や工夫改善すること等については不得意であることがわかる。したがって、これらの分析結果より、仲間と協働する力については仕事や日常生活の両方で十分に発揮できているが、対人サポートに関しては仕事では必ずしも充分発揮できていないが、日常生活上では発揮できていることが判明した。

表7 地域や家族との日常生活などで発揮できている能力



5. 考察

今回の調査結果から、サービスマーケティングを実践する正課外学習を行った卒業生(以下、経験者とする)のキャリアや社会性の形成に、これらの学習効果が影響を与えていることがわかった。

特に、「仲間との協働」などの人間関係やコミュニケーションに関する項目に、その傾向を見ることができる。職場や日常生活の両方において、サービスマーケティングの学習効果が表れていると考えられる。

今回の調査結果の内容は、「サービスマーケティング」科目の振り返りやSSS活動などの活動報告、そして卒業時に実施されるアンケート調査の結果と概ね一致するものであった。

ただ、経験者と非経験者では、職場、日常生活ともにある程度の差が生じると考えていたが、職場で発揮できていると思う能力点の平均の結果は、非経験者に比べて、やや高いという程度であった。

経験者の学習効果が職場で発揮できていると思う能力点においてのみ弱いという結果の要因として、調査対象者の勤続年数が影響していることが推測される。今回、本学のサービスマーケティング活動と科目の両方が本格的に実施した時期を考慮して調査対象者を卒業後5年以内と設定した。そのため調査対象者に入社1年目の新入社員などが入り、職場において、これらの学習成果を活かす職責を担っていない卒業生の調査結果が、このような結果につながったのではないかと考える。

これらのことは、日常生活で発揮できている能力点において経験者群の方が非経験者群よりも代表値が明らかに高いことから推測することができる。

6. 今後の課題とまとめ

今後の課題としては、学習効果の測定を継続して実施するために、今回実施した質問紙調査の項目の検証とこれらを踏まえた測定項目の有効性を評価することがあげられる。こ

のほか、詳細な分析を行うための調査項目の設定なども課題として考えられる。

また、今回、質問紙調査以外に、同じ測定項目でインタビュー調査を6名の卒業生に実施したが、これらのインタビュー内容の分析を行い、その結果と質問紙調査法の結果と比較検討することもあげられる。このインタビュー内容の分析を行うための手法としては、テキストマイニングなどが考えられるが、これらの手法を用いることによって、卒業生の学習効果の傾向などの解析も実施できると考える。

このほか、調査対象に合わせた評価項目の検討も課題としてあげられる。卒後年数によって職場における業務の習熟度や業務内容の重要度、日常生活における家庭や地域との関係などにおいて変化していることが考えられる。このような卒後年数による差異を踏まえた調査方法と測定項目を今後の調査のために検討していく必要がある。

このようにさまざまな課題があるが、今回の調査から本学のサービスラーニングの学習効果が、卒業生のキャリア形成や社会性の形成などに影響を与えていることを確認することができたと考える。

卒業生に対する本学のサービスラーニングの学習効果を調査し、その調査手法を検討・確定していくことは、本学の「4つのサポート」¹⁰⁾の1つであるサービスラーニングサポートの充実や「サービスラーニング」科目の授業内容の改善において有効なものになると考える。

また、大学におけるサービスラーニングの学習効果の測定は、海外サービスラーニングについて実施された調査が多く、また、その

対象者の数も限られていることがわかった。これらのことから、本研究の意義は高いのではないかと考える。

謝辞

本稿の執筆にあたり、調査をご快諾いただいた昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター（昭和 CSLセンター）人間社会学部福祉環境学科特任教授 昭和 CSLセンター長 興栢寛氏、昭和 CSLセンター 障がい学生サポートセンター 関根史恵氏に改めて御礼を申し上げます。

注および引用

1. SSS活動は、本学で2003年から実施されている学生スタッフ活動である。毎年、1学年100名以上の学生がこのスタッフ活動を行っている。また、このSSS活動は、文部科学省が高等教育の活性化を促すためにはじめた「特色ある大学教育支援プログラム」に『タテよこ交流に始まる学内サービス学習支援』というテーマで採択（平成16年度）されたものでもある。

このSSS活動には、新入生のガイダンスのサポートや学内イベントのサポートを行う CAST（キャスト）スタッフ、学内行事の撮影を行い、映像作品の制作を行う PALM（パーム）スタッフ、環境や防災などをテーマにキャンパスの環境のための活動を行う SEED（シード）スタッフ、地域活動に参加し、地域と連携した活動を行う LINK（リンク）スタッフの4つの活動がある。

2. 桜井正成。地域活性化ボランティア教育の深化と発展：サービス・ラーニングの

- 全学的展開を目指して。立命館高等教育研究。2007, 第7号, p.21-40.
3. Robert G. Bringle, Mindy A. Phillips, and Michael Hudson. The Measure of Service Learning : Research Scales to Assess Student Experiences. American Psychological Association, 2004.
 4. 6つの評価軸の日本語訳は桜井 (2007) による。
 5. 尾崎 慶太 山本 秀樹。教育効果と地域貢献を高めるためのサービスラーニングの研究 -海外サービスラーニング (カンボジア) のプログラム分析を通して。関西国際大学 教育総合研究叢書。2011-03-31, Vol4, p.71-82.
 6. 橋本 由紀子。日本の高等教育機関における「サービスラーニング」が学生に与える教育効果について。吉備国際大学研究紀要。2010-03-31, 社会福祉学部 (20), p.19-29.
 7. 山田 明。「高校生におけるサービス・ラーニングの学習効果に関する研究」～サービス・ラーニング・フォーラムの宗像の実践を通して～。日本生活体験学習学会誌。2007, 第7号, p.9-49.
 8. 平山智浩。「日本の高等学校の実践を通じたサービス・ラーニングの効果分析」- その学習効果, 学校改善効果およびコミュニティへの影響 -。政策研究大学院大学, 2009.
 9. 昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター (昭和 CSLセンター) 人間社会学部福祉環境学科特任教授 昭和 CSLセンター長 興相寛氏, 昭和 CSLセンター 障がい学生サポートセンター
 - 関根史恵氏に, 2011年3月3日に実施したインタビュー調査を基にまとめた。
 10. 「4つのサポート」は, 学生が安心して学生生活を過ごすことができるために設けられた自由が丘産能短期大学の学生サポート体制のことである。学生の就職や編入学を教員とキャリア支援センターが連携してサポートするキャリアサポート, 学習活動と資格取得を支援するアカデミックサポート, 学生スタッフ活動など学生の自主的な活動を支援するサービスラーニングサポート, アカデミックアドバイザーによる個別相談や学生同士の交流を支援する学びのサポートの4つのサポートがある。